

# アートによる文化のまちづくり

—— 公共空間再構築の一助としてのアートの可能性 ——

中 島 正 博

## A Role of Culture and Art for Community Development

Masahiro NAKASHIMA

Cultural enhancement has become important for the community development since we are now in the age of seeking more spiritual happiness than materialistic satisfaction. Artistic culture would contribute people's spirituality and in consequence develop a community. Public art activities conducted at many towns are now one of cultural movements. Hiroshima city is one of those towns where the public arts have been actively performed. The artists of Hiroshima City University have been working on "Art Projects" for the last decade in and around Hiroshima city. I reviewed recent ten Art Projects by hearing from the artists who performed the Projects. After reviewing these Art Projects I recognized the Projects have a role of educating participants' spirituality and have a potential power to develop communities. Among many fruits of Art Project, it is worth noting a power of "connecting man, nature and time" in relation to community development. The power has a role of building "public space" in a community and in our mind. Connecting a person with a person, connecting man with the nature and connecting people with time will help us develop a community or a world of partnership, togetherness or common not but separation, dividing or segregation. These virtues are actually a way of life and a part of culture that we will have to recover in our present society.

I. はじめに  
II. アートプロジェクトと文化のまちづくり

III. 人・自然・時を繋ぐアート  
IV. むすび

### I. はじめに

これまでの都市づくりから私たちは何を学んだだろうか。都市のインフラや施設を建設して効率性や

便利さを獲得した。それに比例して幸福も手に入れただろうか。必ずしもそうではないと思う。それはなぜだろうか。都市化に伴い自然環境が貧弱になった、あるいは歴史的な町並みが消えた、というよう

に自然や文化が軽視されてきたことが、私たちの生活の質（幸福感）と都市の便利さが必ずしも一致しない理由の一つだろう。歴史的な建造物や自然とどのように共存するのか、ということは私たちの生活様式や生き方、つまり文化に帰する。これまでの都市作りの結果、私たちの文化が問われている。

これまでの都市は大衆消費社会、すなわち大量生産・大量消費・大量廃棄の現代文明の上に築かれた。人間の外に存在する物質の数量を追求する消費社会は、人間の内なる精神的な豊かさ<sup>1</sup>の向上を忘れさせ、その結果生じる精神的な空虚（飢餓）感がさらに消費への欲望を肥大させる。精神的あるいは文化的な豊かさを充実することよりも、スクラップアンドビルドのモノ作りの発想が優先している。

人びとの日常は金儲けや大量生産の仕事に忙しく、週末の貴重な時間は大量消費に費やす活動に忙しい。その結果、人としての生き方やよりよい社会について学び考える、文化的な営みに携わる余裕や時間が無くなるのである。そのようにして文化レベルが低下しており、それが現代社会の諸問題を生む原因のように思える。

大量生産・大量消費・大量廃棄の反省は現代社会の多くの人びとが共有している。これまでのモノ作り中心の都市開発や都市整備の反省を込めて、平仮名の「まちづくり」の言葉が用いられるようになった。一般にまちづくりとは「地域をよりよくしていきたいという考えや行動の全体を指している。ひらがなの『まちづくり』は、ハードなモノ作りだけではなく、地域の運営や自治のあり方、市民の共同意識や活動などをよりよいものにしていくという仕組みづくりやコトおこしなど、さまざまなソフト面を含む」（田村2000）のである。全国のまちづくりの事例を紹介している『全国自治体まちづくり先端情報2000』（1999）や『全国市町村長が推薦する地域づくり成功事例集』（1996）などを見ると、ハード・ソフト両面の施策が挙げられているが、多岐に亘るソフト（仕組み作り）の施策が圧倒的に多い。

そのようなまちづくりの方向性の中においても、精神的な生活の質や文化を豊かにする努力が今後さらに必要である。本稿ではそれを、物理的なモノのまちづくりに対して、「文化のまちづくり」と呼ぶ。これは飽食やモノで満足したから、次に、精神的・文化的な豊かさを求めようという考えではない。ヒトは常に変化・発展<sup>2</sup>することを宿命づけら

れている。これからどのような社会を築けばよいのか、今それを考えることが求められており、本稿はそのための試みである。それは物質文明に偏って犠牲を払ってきたいわゆる「先進国」の回り道を、いわゆる「途上国」が回避するために役立つかもしれない<sup>3</sup>。そのようなグローバルな視点とローカルなまちづくりでは、規模のギャップが大きいように見えるが、世界はローカルな地域社会が無数に集まった集積であり、特にグローバル化が進む現代社会では、まちづくりの視点から文化の役割について考えることが有意義であると思う。このような現代の時代的な背景に関する問題意識から、本稿では文化を豊かにするまちづくりについて考えたい。

## Ⅱ. アートプロジェクトと文化のまちづくり

文化的な活動にはさまざまな形態がある。文化とは元来「人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果。衣食住をはじめ技術・学問・芸術・道徳・宗教・政治など生活形成の様式と内容とを含む」<sup>4</sup>のであるが、本稿では人間の精神生活により係わる芸術、そのなかでも美術活動に焦点を当てる。

地域で展開するアートプロジェクトが国の内外で広く行われている。広島でも広島市立大学芸術学部によって、数多くのアートプロジェクトが地域で展開されてきた。広島におけるこれらのアートプロジェクトについて、まちづくりとの関連でレビューしてみたい。筆者は美術には素人であるが、素人であるが故の客観的なあるいはさめた目で、それぞれのプロジェクトを横並びで見ることの意義はあるだろう。

本稿ではまちづくりとの関連でアートプロジェクトの役割を考える。芸術学部によって最近行われた幾つかのアートプロジェクトを対象<sup>5</sup>にして、その目的や成果などについてプロジェクトを主導したアーティスト（芸術学部教員）<sup>6</sup>に聞き取り調査を行った。その聞き取りの内容から文化のまちづくりの可能性を考察した。調査の対象にしたアートプロジェクトは表1の通りである。表1は10のプロジェクトについて簡単な紹介をしている。

表1 調査の対象にしたアートプロジェクト

分野	プロジェクト名	分野	プロジェクト名
デザイン	横川レトロバス復元	メディア	ヒロシマグラウンドゼロ
	広島市行政の一環として横川駅周辺のリニューアルが計画された。そのシンボルとなるモニュメントを横川駅に設置するために、横川一可部の間を運行した100年前の国内第1号バスを住民と共に復元した。(2002-2004)		爆心地の猿楽町と細工町は壊滅した。その被爆前の町並みをCGにより復元した。復元に情熱を燃やす住民の記憶を頼りに、当時の町の様子を聞き取りながらCGを完成した。(2000-2005)
油絵	キッズキャンパス	油絵	光の肖像展
	創造性という面から見れば最も感性の柔軟な幼児を対象に、本格的な芸術制作に触れる機会を設け、幼児の創造性を育む事を目的として、大学の教育環境を利用して美術の基礎教育をおこなう。子どもたちに絵を描いてもらい作品展示会で全体発表として一般に公開した。(2005-2006)		被爆60周年を歴史に残すために、「広島顔」として被爆証言者の肖像画を描いて展示した。被爆体験やその後の半生なども聞き取り作品の説明文に記してある。次世代への継承をテーマにした被爆二世や三世の肖像画もある。(2005-2006)
日本画	展覧会をつくる	デザイン	アニメーションフェスティバルへの協力
	講座を通じて、受講生(市民)自らが展覧会を企画立案し、運営に必要な知識、実務を学び、展覧会を実際に開催する。多様な表現、技法材料、歴史に加え、制作現場、創得意図などについて美術作品をより深く理解し、展覧会来場者を対象に美術館教育プログラムを作成し実施した。(2004-2006)		2年に1度広島で国際イベントとして開催されるアニメーションフェスティバルに協力している。アニメ作りのワークショップ等に協力し、「アニメーションアカデミー」を開催した。アートとしてのアニメ表現やアニメーションの普及のために、アニメーション作家、ディレクター、プロデューサー等を招き公開講座として開催した。(2005-2006)
彫刻	KHORA I & KHORA II	彫刻	大塚かぐや姫
	広島市立大学とドイツニュルンベルク美術大学の大学院生や教員が、地元住民の協力を得ながら、地域とアートの融合を目指したアート作品を大塚地区周辺に展示した。(平成17年)。広島市立大学の大学院生がドイツニュルンベルク美術大学を訪問して作品を制作し展示した。芸術の地域展開と国際展開を同時に行った。(2005-2006)		広島市立大学が位置する大塚地区の里山には竹林が広がっている。ほとんどは荒れた状態で放置されており、地域の環境や景観に悪影響を与えている。この竹林に人手を加え、京都に見られるような人にやさしい竹林を蘇らせるとともに、造形作品の制作を通して竹を美術の素材として利用する可能性を模索する。これを大学と地元住民が協働して試みる。(2006-2007)
現代表現	旧中工場	デザイン	比治山公園
	新施設建設に伴い現在は機能を停止している広島市の旧中工場(ゴミ焼却施設)をアートセンターに再利用するプロジェクト。関連するプロジェクトとして、「ゴミがアートになる!超高品質なホコリ」展、「わたしの庭とみんなの庭」展、「金庫室のゲルトシャイサー」展、「どうする?広島折鶴」展などが開催された。(2007)		広島市が管理運営する「比治山公園」を芸術公園にする計画が進められており、その実現のために実験展示を行う空間を創出する(2007)。

出典:プロジェクト担当者へのヒアリングとURLなどを参照して作成。

以下にそれぞれのアートプロジェクトの目的や概要を紹介して、まちづくりとの文化的な係わりやその可能性を述べる。これらは特定の地域や芸術学部で展開されたアートプロジェクトである。つまりアーティスト(大学の教員)が何らかの形で、市民を巻き込み芸術活動を行うタイプのものである。その活動を通して、アーティストと参加市民の間にどのような相互作用や繋がりが生まれたのか、そこに特に着目して聞き取りを行った。なぜならアートプロジェクトでは、芸術活動を通して人びとの感性が高

められ、それが人びとの間の共感を生み、人びとの繋がりに発展する。その感動は人びとの生き方に影響し、人びとの生活の一部になる。その生き方は人びとの繋がりを通して広がり町の文化になる。例えば町を美しくしたいと思うような共感であり、人間らしく生活できる社会づくりに協働することであり、それは人びとの生活の質の向上にも資する。

## 1. 横川レトロバス復元

このプロジェクトの契機は、広島市横川駅とその周辺のリニューアルの一環として、そのモニュメントの制作を行政が大学に依頼したことである<sup>7</sup>。100年前に横川と可部の間を運行した日本最初のバス（「レトロバス」）を復元するプロジェクトが始められた。レトロバスの復元は大学のアーティストと地元住民の共同作業で行われた。復元するのは単なる模型ではなく芸術作品の制作である。大学のアーティストが作品の質にかける情熱は、時間をかけて地元住民に深く伝わり<sup>8</sup>、他方、地元住民の町への愛情はアーティストの情熱をさらに高めた。そのようなアーティストと地元住民の相互作用を経て、住民が最高の誇りを持ちかつ住民から愛されるレトロバスが完成したのである。そのような住民の気持ちはアーティストとの共同作業の賜である。単に鑑賞して美しいという共感ではなく、住民もその制作に参加して、アーティストの情熱に感動したからこそ生まれた気持ちである。

このようなレトロバスの制作とその作品への住民の誇りは町の「文化」<sup>9</sup>を形成する力に発展した。すなわち、作品制作への参加はアートを愛する住民を生み、その結果、アーティストにやさしい町の空気をつくったのである。例えば、若いアーティストが町に集まり、映画の制作や演劇活動が行われるようになった<sup>10</sup>。文化のまちづくりを含む一つの社会的な変革が地域で起きたと言えるだろう。文化を大切にすることは住民の生活の質を向上する町でもある。あるいは生活の質を向上する文化を育む町である。このようにしてアートによる文化のまちづくりが実現したのである。その証としてその後も、横川住民によるまちづくり、町おこし、町の活性化へ向けた活動が続けられている<sup>11</sup>。

## 2. ヒロシマグラウンドゼロ

広島の被爆の爆心地（グラウンドゼロ）であった猿楽町と細工町の、被爆前の町並みをコンピューターグラフィックス（CG）で復元するプロジェクトである。その契機は、被爆で瞬時に消滅した昔の町並みのCG復元を願う、住民（被爆者）<sup>12</sup>の情熱にアーティストが感動したことである。アーティストや大学院生が当時の町を知る生存者から話を聞いて、町並みを復元するCGの制作を開始し、6年間かけて完成させた。先の横川レトロバス復元と同様

に、町を愛する人たちの情熱に、アーティストが共感したことが共通している。

このCGの制作は、被爆前の町を知る人びとの存在とCGの技術進歩の両方が揃った現在だからこそ実現した。生存者は被爆前の町を記憶しているものの、その記憶はぼやけている。記憶に基づいてアーティストが家や町のCGを制作すると、その画像に刺激されて生存者（住民）の記憶がさらに掘り起こされ、それに基づいて画像をより正確なものに修正する作業が続けられた。生存者とアーティストの長い共同作業のプロセスによって、爆心地の町並みがCGで復元されたのである。同時に被爆生存者の心もアーティストに継承された。共同作業の過程で証言者の話を聞き、戦争を知らない若いCG制作者の心に、原爆の悲惨さや戦争の愚かさも伝えられたのである<sup>13</sup>。

文化のまちづくりの観点から見れば、このプロジェクトの最大の意義は、町の歴史を継承するべく復元し記録したことであろう。歴史を重ねて文化は形成される。復元された爆心地の歴史は、それを継承する人びとによって、広島のみならず、今後のまちづくりに見えない力を及ぼすだろう。そしてなによりも、この町と暮らしを消し去った戦争や核兵器に対する怒りの文化、さらには平和の文化を促進する力になる<sup>14</sup>。

人間は昔を懐かしむ。私たちにとって自身の原風景は心の宝である。しかし原爆で町を失った人びとは、昔を思い出すきっかけさえも奪われた。復元された町のCGを見たお年寄り懐かしさで感動し涙した。昔を懐かしむ契機（CGの鑑賞）を得て、心の中に原風景を取り戻すことが出来たのだろう。誰にとっても原風景は自己の一部<sup>15</sup>である。従ってそれを回復することは、奪われた自己の一部を取り戻すことであり、被爆住民の心の癒しにもなるだろう。それもこのプロジェクトの大事な意義であると思われる。

## 3. キッズキャンパス

このプロジェクトは子供のための芸術版公開講座である。講座は明確な方針に基づいて行われている。すなわち講座の目的は子供の創造性を伸ばすことである。その前提にある考えは、子供は創造性に満ち

ており、大切なのはそれを解放することである。それを解放するために、大学は一つの遊び場である、という発想で公開講座が行われた。さらにこの公開講座が芸術表現をテーマにするのは、芸術の本来の役割は人を自由にするということであるという思想である。美術の創造性はその自由の一つの表れである。

このような方針の元に、「自然と触れ合い芸術家と共に描く」あるいは「親子で楽しむ造形遊び」という具合に、講座では遊びのような感覚で、制約を設けず入り口を広くして創作活動を行う。講座で創った作品は大学のキャンパスや町の施設に展示して一般に公開する。また、この試みは幼児の美術教育の新しい仕組みも創り出している。その仕組みはまだ形成過程ではあるが、子供が主役の講座にその親と一緒に参加し、大学教員と美術学生が制作のアドバイスをし、若者のグループ<sup>16</sup>が幼児教育の専門家として参加する、という形である。

文化のまちづくりの視点からこのプロジェクトの意義を挙げるならば、先ず教育による人づくりである。人づくりはまちづくりの最も地道にして最も根本的な要素である。可能性を最大に秘めた幼児の時期を対象にする美術教育は効果的である。それは文化の根を深く広く張ることに貢献するだろう。あまりに地味であり短期的な効果は見えないが、人づくりは最も重視されるべきである。次にそのような芸術教育を行うために、地域の美術家や幼児教育専門家などが協力する仕組み作りもまたまちづくりの一つである。講座の成果を展示する催しもまた文化として、今の町に潤いをもたらすだろう。

#### 4. 「光の肖像」展

広島を被爆60周年を歴史に残す意義を込め、被爆証言者の肖像画を描いて展示するプロジェクトである。西洋で生まれた油彩画は“人間を表現する”伝統があり、アーティストにとって“人間とは何か”を探求することは大切な課題である。そのような意義を込めて、広島における地域貢献と油彩画の教育研究を目的として行われた。

肖像画の制作はモデルである被爆者の話を聞いて、主に教員と大学院生によって行われたが<sup>17</sup>、彼らは被爆証言者たちの存在そのものに感動した。すなわち証言者たちは「広島顔」であり、60年を経た原爆を今に継承するのみならず、「今の原爆の現実」そのものであった。さらに「こんなに素晴らしく生

きている」という証明でもある。そのような被爆者を前にして描くことは、人間を探求する肖像画の課題にしっかり接近するものであろう<sup>18</sup>。

文化のまちづくりの観点からこのプロジェクトの意義を考えるならば、町の歴史を記録に留めることであろう。それも町の歴史に欠かせない被爆証言者という現実の記録である。町の文化は歴史の積み重ねで形成される故に、その歴史を記録する意義は大きい。さらにアーティストや画学生たちによる被爆証言の継承、肖像画を制作することによる被爆体験の継承、そして肖像画の展示<sup>19</sup>による一般市民への被爆体験の継承、などもまちづくりに最も重要な人づくりそのものである。

#### 5. 展覧会をつくる

大学で市民講座を開催して、その受講生自らが展覧会を企画立案<sup>20</sup>し、運営に必要な知識、実務を学び、展覧会を実際に開催する。美術作品をより深く理解するために、多様な表現手法、技法、材料、歴史に加え、制作現場、創作意図などについて学び、展覧会の来場者を対象に教育プログラムも作成し実施している。この講座の特徴は、美術作品に関する理解を高めるために、教育プログラムを取り入れることである。

このような市民対象の生涯教育によって、地域の文化や芸術的な社会環境を向上させることが、ひいては大学で美術教育を受けて卒業する芸術家の卵を、この広島で受け止める地域の感性を育むことになる。つまり芸術に携わる人材がこの地域に定着し、その結果地域の文化が高まるためには、芸術を愛好する地域の感性が必要である<sup>22</sup>。従ってこの市民講座は、大学を卒業する芸術家の卵を引き続き応援<sup>23</sup>する活動であり、二重の意味で人づくりの教育活動なのである。

このように講座の目的は人づくりであるが、換言すれば（大学の卒業生を受容する）文化のまちづくりそのものがこの市民講座の役割である。講座に参加する市民は一般の美術愛好家、展覧会を催す美術作家、さらにはまちづくりの市民活動に関わっている人びとである。この講座を受講することで、美術作家が教育的手法を取り入れて、より充実した展覧会を企画する例が現れている。さらに、一人一人が互いに係わるこの講座を通して、「展覧会をつくる」苦楽を分かち合った、受講生のネットワークが町に

広がっている。その一つは岡本太郎氏の壁画「明日の神話」を広島に誘致する活動への参加である。この壁画が市民のボトムアップの力で広島に誘致されるならば、「広島の文化革命」あるいは「都市の意識」を変えることも期待できる。それは文化のまちづくりの大きな一里塚となるだろう<sup>24</sup>。

## 6. 広島国際アニメーションフェスティバルへの協力

広島国際アニメーションフェスティバルは、国際アニメーションフィルム協会が世界の4都市で行う国際的な行事である。広島では1985年から隔年で開催されている。大学は国際イベントのこのフェスティバルに協力している。芸術学部はアニメ作りのワークショップなどで同フェスティバルに協力し、一般市民を対象に「アニメーションアカデミー」を開催している。後者のアカデミーでは、アートとしてのアニメ表現やアニメーションを普及するために、国内の著名なアニメーション作家、ディレクター、プロデューサー等を招き、公開講座として開催している。公開講座は広島の経済団体の寄付を受けて、アニメーション芸術の普及のために実施された。広島のフェスティバルが始まって以来、参加者数は着実に増加している。さらにアニメ表現の教育機関も全国的に増加して、表現技術としてのアニメーションは若い人の間に認知されるようになった。

広島のまちづくりに国際アニメーションフェスティバルが貢献する可能性は大きい。広島市は「アニメの街」を目指している。広島国際アニメーションフェスティバルに市行政は財政支援をしており、市の経済界もスポンサーになると同時に、産業創出などの経済活性化も期待している。しかし問題もある。表現方法としてのアニメと商業アニメ（いわゆる漫画やテレビアニメ）との溝が大きく、一般市民の多くの認識は後者である。誰もが画を描くような、広く開かれた表現方法としてのアニメの認知が不足している。広い意味でのアニメ表現が市民に認知され、市民により近い存在になれば、広島のフェスティバルを契機にして、アニメによる文化のまちづくりに発展する可能性があるだろう。

## 7. KHORA I と KHORA II

KHORA I と KHORA II は同じコンセプトのプロジェクトを異なる場で実施したものである。KHORA (コーラー)<sup>25</sup>とは古代ギリシャ語で場とか

空間などの意味を持っている。この言葉は哲学的概念に基づいているが、プロジェクトに即して平易に述べるならば、作品を制作する特定の場とそこで生まれる作品は一体の関係にあり、コーラーとはその作品を生み出す場のことである。そのような作品を制作することがこのプロジェクトのコンセプトである。つまり具体的には、地域(場)の歴史や風土を意識して作品を創り、その地域を背景に作品を展示する<sup>26</sup>。そしてその場は大学周辺の里山(コーラーI)と独ニュルンベルグ美術大学(コーラーII)の2つの場であった。コーラーIではニュルンベルグ美術大学の教員・学生が広島を訪問して、大学周辺の地域で芸術学部の教員や学生と共に作品を制作・展示した。そしてコーラーIIは逆に芸術学部の教員や学生がニュルンベルグ美術大学を訪問して、その場で同様に作品を制作・展示した。

コーラーIは、文化のまちづくりに向けて、地域における大学の役割が見えたプロジェクトであった。大学周辺を制作の場に選んだコーラーIでは、地域の住民はプロジェクトにさまざまな協力をした。例えば制作の材料を提供したり、地権者として土地を提供したり、通訳として外国人の世話をしたり、などとそれぞれの人の得意な分野で協力をした。このプロジェクト以前にも地域住民との交流は何度か行われていた。しかし、いずれも一過性で、大学と地域との接点が見つけられず、大学は地域に溶け込めない状態であった。コーラーIでは1ヵ月半に亘る大学と地域住民との交流の過程<sup>27</sup>で、互いに自分の役割を発見する関係作りができたのである。そして数百人の地域住民が参加して、最後のパーティーを飾ることができた。この交流プロセスに見られるのは、芸術作品の制作に関与・協力する地域とその住民、そしてそれに支えられて制作するアーティストの関係である。これはまさに先述のコーラーのコンセプトが実現された側面を示している。また文化を大切にするまちづくり<sup>28</sup>、文化の拠点を誇りにするまちづくりの可能性も秘めている。

## 8. 大塚かぐや姫

広島市立大学が位置する大塚地区の里山には竹林が広がっている。ほとんどは荒れた状態で放置されており、地域の環境や景観に悪影響を与えている。この竹林に人手を加え、京都に見られるような地域社会と調和する竹林を蘇らせるとともに、造形作品

の制作を通して竹を美術の素材として利用することが目的である。そのために先ず、大塚地区の竹林の間伐を大学の教員・学生と地元住民が協働して行った。

このプロジェクトには様々な効果が見られる。先ず、教員・学生がボランティアとして地元の自然環境を整備したことである<sup>30</sup>。竹林は放置しておく外延的に広がり、地域社会に被害を及ぼす。人間社会と調和する竹林を維持するには、間伐など人間の働きかけが必要である。自然環境の整備<sup>31</sup>を地元住民と協働作業で行い、それに地元外の里山づくりのNPO（専門家）も応援に駆けつけた。先のコーラーIに参加した地元住民が、この大塚かぐや姫プロジェクトにも参加しており、大学と地元社会の関係が持続し始めたことを示している。

次に、学生が大学の地元で作品の素材を入手できる意義は大きい。それは先述のコーラーのコンセプトと一致している。つまり自然の中で竹を切り出す作業を通じて<sup>32</sup>、自然の現象や竹の材質を肌で感じるにより、それが竹の素材感を生かした作品作りに繋がる。また自然豊かな環境の中で、地元社会と係わり、自然環境と係わりながら、学生の教育を行うことは、大学が輩出する人材の人間性をも豊かにするだろう。

文化のまちづくりの観点から見ると、竹林や里山の整備を通じて地域の景観づくりに貢献し、さらに地域住民との“協働という文化”の形成の一端を担った意義は大きい<sup>33</sup>。そして今後は竹の芸術作品づくりを通して、地域へ文化の潤いを提供できるだろう。

## 9. 旧中工場アートプロジェクト

新工場建設に伴い現在は機能を停止している広島市の旧中工場（ゴミ焼却施設）を、アートセンターとして再利用するプロジェクトである。関連するプロジェクトとして、「シンポジウム：地域におけるアートの役割」<sup>34</sup>、「ゴミがアートになる！超高品質なホコリ」展、「わたしの庭とみんなの庭」展、「金庫室のゲルトシャイサー」展、「どうする？ 広島折り鶴」展などが開催された。

このプロジェクトの中心はゴミをアートに変える旧中工場のプロジェクトである。これは文化のまちづくりの試みである。旧中工場のゴミを使うアート展によって、ゴミに対する人びとのイメージ

を変える可能性がある。また、アートの展示場として旧中工場を使うことにより、住民にとって、ゴミの焼却工場というマイナスのイメージが、プラスのイメージに変わるかもしれない。もしそのようになれば、町にとって好ましい施設として、旧中工場は新しい役割と命を与えられて、町の歴史を生かしながらまちづくりに一役買える可能性がある。従ってこのゴミアートの展示は、地域住民の感性に訴えるひとつくりとまちづくりの側面を備えている。それは、ゴミと焼却場に対するイメージを変える、という文化的なインパクトである。まさにアートによる文化のまちづくりの可能性を秘めたプロジェクトである。そのような可能性を模索しながら、旧中工場プロジェクトは今後も続けられる予定である。

このプロジェクトと同時に実施された「わたしの庭とみんなの庭」展は住民参加がポイントである。「私の庭」はみんなも楽しめる庭であり、同時に、「みんなの庭」は私も楽しめる庭である。さらに簡明に表現すれば、私の庭はみんなの庭であり、みんなの庭は私の庭であると私は解釈したい。もちろん所有権（経済的価値）には無関係の美的価値観による精神的表現である。それを実践的に表現すれば、みんなのために私の庭を美しくしよう、みんなの庭を美しくするために私も貢献しよう、ということである。これは私と公（みんな）に関する意識を変えてゆく可能性を内包している。私とみんなの間の分断を繋げることである。つまり感性を通して、私は公の一部であり、公を支える存在である、という自覚が生まれる可能性である。当然それは庭づくりに止まらず、まちづくりやさらに先の地球環境まで広がる射程を含んでいる。これは本稿のⅢ章で述べる「公共の再構築」の可能性を秘めた挑戦と言えるだろう。

## 10. 比治山芸術公園

広島市が管理運営する比治山公園を芸術公園にする計画が進められており、その実現のために実験展示を行う空間を創出する。広島平和公園を中心とした広島市の東西南北の都市軸線上において、広島市街地東部の文化的中心機能を担う場として、比治山公園を位置づける構想に基づいている。

## Ⅲ. 人・自然・時を繋ぐアート

前章で紹介したアートプロジェクトの特徴を「文

化のまちづくり」の中に位置づけることを試みる。先ず、アーティスト・学生、プロジェクトに参加する市民、作品を鑑賞する一般市民、などの主体（人びとの）間の相互関係を整理する。それはアートによる人づくりの側面でもある。その人づくりがさらに発展する方向に、アーティスト・学生の活動によるまちづくりや文化的な向上やその可能性などを整理する。すなわち文化のまちづくりである。この二つの方向性によって先のアートプロジェクトの特徴を整理したものが表2である。人づくりは本稿で取り上げたすべてのアートプロジェクトに共通する要素である。アーティスト・学生・プロジェクト参加市民はプロジェクトにより相互に影響する。講座の参加者や展示を鑑賞する一般市民もアートにより感

性を高める。そのような人づくりは文化のまちづくりにとって不可欠で最重要の基礎である。人づくりが深く広く広がれば、文化のまちづくりへ自ずと広がるだろう。従って、前章のすべてのプロジェクトは、文化のまちづくりへ繋がる可能性を内包している。

アートプロジェクトは「文化のまちづくり」のために、「繋ぐ」という役割を備えていることが表2の中で浮かび上がってくる。すなわち共感による人と人の繋がりである。アートあるいは芸術に特徴的な「繋ぐ」機能は何に起因するのだろうか。それはアートが感性に訴える作品表現だからではないか。アートと対照的な言語は論理による抽象表現である。作品表現のアートは論理に制約されない直感的な深

表2 アートプロジェクトによる人づくりと文化のまちづくりの可能性

アートプロジェクト\まちづくり	人づくり	人づくり・まちづくり	文化のまちづくり（文化の促進）	
レトロバス復元	レトロバス制作過程の共同作業で、アーティストと横川住民の間に共感（町への愛、作品への思い）が生まれる。	横川のまちづくり市民団体が誕生した。祭り・経済活動など町おこしの活動に繋がる。	若いアーティストが集まりアート（映画・演劇）活動が盛んになった。	アーティストを大切にしている町の文化が育った。
グラウンドゼロ復元	被爆前の町並み復元を願う被爆者の情熱にアーティストが感動。アーティストが被爆者の過去の記憶を発掘。被爆者が反核のアーティストづくり。	CGの放映による反核・平和市民の人づくり。	CGを制作して町の歴史を記録した。平和都市の基礎づくり。	反核・平和の文化のまちづくり。
キッズキャンパス	美術教育で子供の創造性を伸ばす。幼児の美術教育の仕組み作り（教員、保母、保護者）。	子供の作品の展示会を開催し市民が鑑賞。美術教育の関心を促進	展示会開催による町のうおい作り。	幼児教育による芸術文化の底上げを促進。
光の肖像展	画家が被爆証言者の存在に感動。画家が肖像画を制作。反核平和市民の人づくり。	一般展示で市民が歴史を継承。反核・平和市民の人づくり。	被爆60年の「広島顔」を記録し残す（都市の歴史の記録）。	歴史を記録し文化の基礎固め。反核・平和の文化づくり。
展示会をつくる	参加者の美術に対する理解と感性を高める。参加者が展示会をつくる過程で切磋琢磨する人づくり。	参加した作家が自身の展示会で教育的プログラムを採用→市民の美術理解の向上。講座参加者による市民のネットワークが拡大。	岡本太郎の壁画「明日の神話」を招致するネットワークにも参加。	アートを受容し愛する都市の文化を促進。アーティストが活動できる文化のまちづくり。
広島国際アニメーションフェスティバルへの協力	アニメーションアカデミーに参加してアニメ表現への理解者が増大。	世界的なイベントを通して広島の経済の活性化。	アニメ作家、アニメ理解者の増大。	アニメ芸術の文化的な理解を広げる→「アニメの街」づくり。
KHORA I & KHORA II	作品制作で学生が地域に対応できる（art in residence）。アーティスト・学生と地域住民の相互交流。地域住民がボランティア活動に参加（場の提供、宿泊提供、通訳ほか）。	地域との交流・繋がりが成長。地域の人と自然が学生と作品を育てる。		地域住民の協力を得て作品を地域に展示。地域住民の芸術理解を促進。
大塚かぐや姫	学生が作品の素材に親近感を持つ。地域の人と自然が学生と作品を育てる。	地域住民と協働で地域の自然環境の維持（竹林の景観づくり）。	竹を素材に使う作品の展示。	地域住民の芸術理解を促進。
旧中工場アートプロジェクト	「ゴミがアートになる！超高品質なホコリ」展、「わたしの庭とみんなの庭」展、「金庫室のゲルトシャイサー」展、「どうする？広島の折り鶴」展などによる人づくり。	不使用（迷惑）施設の創造的活用によるまちづくり。	大量生産・消費・廃棄あるいはスクラップアンドビルドの文化を反省するインパクト。	ゴミや迷惑施設に対するイメージの変化→消費文化の変化の可能性。
比治山芸術公園	アーティスト・学生による作品の発表・展示による、作家および市民の人づくり。	平和公園を中心とした、広島の東西南北の都市軸のなかで、東に位置する文化のまちづくり。	広島の都市住民の生活の質を向上する文化的発信拠点。	広島流の文化の創造・発信の促進。

出典：それぞれのアートプロジェクトのアーティストから聞き取りをして筆者が作成した。



みと広がりがある特徴であり、五感や体験に訴える故に人の使用言語にも関係なく、「伝達できる意味」の可能性も大きい。それが、人の共感をよび起こす力となり、繋ぐ力も大きくなる理由ではないか。それでは具体的に何を繋ぐのか考えよう。繋がりの中でも私が強調したいのは、人と自然と時を繋ぐ役割<sup>35</sup>である。それぞれについて以下に説明する。

### 1. 人と人を繋ぐ

アーティスト・学生と参加者と市民の相互関係の多くは、「人と人を繋ぐ」特徴と見なすことが出来る。すなわち人と人の共感や感動、ネットワークの形成などがそれである。これはレトロバス復元、グラウンドゼロ復元、光の肖像展、展覧会をつくる、キッズキャンパスなどに見られることが表2から理解できる。

人と人を繋ぐことは現代的な課題である。近代以後の人間社会は個人が強調されるあまり、人と人の関係が軽視されている。その結果、共同体は弱体化して、地域をはじめとしていずれの社会においても、人間関係は希薄化している。ヒトは人と人の間の関係性を基にして「人間」になり得るにも拘わらず、その関係性が希薄化していることは、「人間存在」が危機にさらされていることを示している。それが現代、個人や社会の多くの問題を生んでいると思われる。

このような現代社会の課題を踏まえると、アートの人と人を繋ぐ役割は大切である。人びとの共感を呼び起こすアートや芸術は、人と人を結びつける大きな力になり得るからである。

### 2. 人と自然を繋ぐ

コーラーⅠ&Ⅱプロジェクトなど地域で展開するアートプロジェクトでは、特定の「場」すなわち自然を含む地域で作品が制作・展示される。従って作品の制作やその展示の場を通して、アートは「人と自然を繋ぐ」営みでもある。その自然とは山野河海、空気も光も水も大地も生き物もすべてである。大塚かぐや姫プロジェクトは自然環境の維持あるいは景観づくりであり、やはり人と自然を繋ぐ活動である。そこで得られた竹の素材を作品に使うことも、同様に人と自然を繋ぐ営みである。

人と自然を繋ぐことはやはり現代の課題である。端的な例としては、現代文明の環境問題に人と自然の

分断の弊害が如実に現れている。先の人間関係の希薄化と同じように、これも近代以後に顕著な現象である。自然の描写はアートの原点であろう。人と自然を繋ぐアートや芸術は、人と自然を結びつける大切な力である。

### 3. 人と時を繋ぐ

人や町は歴史的な存在である。過去や歴史の延長上に現在の暮らしがある。そして人びとの生活様式である町の文化も、歴史（時）の積み重ねの上に形成されている。従って過去や歴史と断絶した文化のまちづくりはできない。すなわち人と時の繋がりにある。

広島は被爆の歴史を経て発展した町であり、反核平和の文化<sup>36</sup>を世界に発信する使命がある。従って、グラウンドゼロ復元、光の肖像展など、広島の歴史を記録し伝えるプロジェクトは、町と市民が歴史を継承することに貢献する。また被爆とは無関係であるが、レトロバス復元、旧中工場のプロジェクトなども、歴史（時）を積み重ねて現在と未来を築く可能性を秘めている。

人と時を繋ぐこともやはり現代的な課題である。現代はすべてが目まぐるしく変転する。その変化の中で、人びとの住む世界では、伝統的な価値観が廃れ、原風景が失われ、現在と過去が切り離される。それは現代人が抱える一種の不安感の原因かもしれない。歴史を忘却するのではなく、歴史に正面から向かい合い、そして歴史を積み重ねることは、人と時を繋ぐことである。伝統や文化を大切にしながら、その上に私たちの未来を築かなければならない。すなわち温故知新である。

### 4. アートによる公共の再構築

人と自然と時の3つの繋がりをまとめて、アートによる「公共の再構築<sup>37</sup>」を提案したい。近代以降、伝統的な共同体社会が風化する中で、「公共」（みんなの世界<sup>38</sup>）を支えるのは政府であるとされてきた（松下2002）。また、市場主義の経済競争の時流の中で、あるいは個人主義の風潮の中で、人は狭い自我の世界へ自己を押し込み、「隣は何する人」のような無関心に表れているように、「みんな」の公共の世界を避けてきた。しかし、ヒトが「人間」になるには他者との係わりが不可欠である。人間関係が希薄化する中で、人間性の危機に晒されている私たち

は、その解決の必要条件として、みんなの世界（公共）の再構築を迫られている。

人と自然と時を結ぶアートがその「公共の再構築」の一端を担えるのではないだろうか。人と人の繋がりも、人と自然の繋がりも、人と時（歴史）の繋がりも、公共の世界の不可欠の要素であろう。みんな（公共）の世界では、人と人の繋がりと言うに及ばず、資源を含む自然の恵みをみんなで分かち合い、時間や歴史を共有することが必要だからだ。それなくして人間社会そして人類の明るい展望は開けないだろう。

もし、みんなの空間に魅力的なアートがあれば、人はその公共空間に愛着を感じ、その空間との間に精神的な繋がりが生まれる。アートを通じて個人が公共空間と繋がり、その繋がりが公共の再構築の一助になるだろう。例えば、美しい公園の中で人はポイ捨てをためらう。それは個人がその公園を大切に思うことであり（人と自然）、他者の目を気にすることであり（人と人）、自己の中に公共の世界が無意識に生まれること（人と時）である。公共の再構築への小さな一歩ではあるが、それもアートによる人づくりであり文化の向上である。これは前章の旧中工場アートプロジェクトの「わたしの庭とみんなの庭」で述べたこと、つまり「私の庭はみんなの庭であり、みんなの庭は私の庭である」ことと共通している。

元来、公共の再構築は一人一人の意識や生き方の上になされ、社会的には「文化革命」とも言ってもよいだろう。公共空間の構築（まちづくり）は、個人の内なる（精神的）公共空間の構築（生き方）と一体である。つまり公共を支える自己の確立である。本稿のテーマの「アートによる文化のまちづくり」とは、単にアートが町に並ぶのではなく、アートが人づくりをすることであると再確認したい。個人が狭い自我の殻を破って、公のみんなの世界を市民が共に築くという生き方、すなわち文化を創るために<sup>39</sup>、アートによる文化のまちづくりがその一翼を担えるのではないだろうか。

#### IV. むすび

文化を貧弱にした都市化の反省に立って、「文化のまちづくり」を構想するためにアートが担える可能性を考えた<sup>40</sup>。人間の表現としてのアートには多

くの役割や力があるだろうが、本稿では「文化のまちづくり」を担う役割に着目した。そのために、アートプロジェクトをレビューした結果、「繋ぐ」役割、特に人と自然と時を繋ぐアートの力が浮かび上がった。「繋ぐ」ことは、近代以後に顕著になった社会の歪みを正すことであり、現代社会が必要としている力である。つまり人と人、人と自然、人と時を繋ぐ働きである。アートの力も借りてみんなの世界（公共空間）を取り戻したい。

公共空間の再構築は、個人が個の世界に閉じこめるのではなく、個人が「人間」になるために、あるいは人びとが人間らしく暮らすために、その必要性が自覚され始めていると思う。公の世界で公を支える個人として生きるには、自己の精神的な変革・拡大が必要である。その一助を担うアートは人間の精神性あるいは社会の文化を豊かにするであろう。

#### 謝 辞

本研究は広島市立大学の平成18年度特定研究「高度な芸術・文化を育てる『まちづくりNPO』」の成果です。研究を遂行するに当たり、同大学芸術学部が展開したアートプロジェクトの聞き取り調査にご協力下さいました芸術学部の教員の皆様に感謝いたします。

#### 注

- 1 「精神的な豊かさ」とは、大量生産大量消費に見られるモノの豊かさとは異なり、心の豊かさあるいは幸福感と言えらるだろう。
- 2 何が「発展」なのか当然議論はあるが、人間は現状に留まることに満足しない、常に改善の工夫をする動物である。
- 3 例えば、1998年に発表されたブータン王国の「国家環境保全戦略」では、「中庸の思想」を基本哲学に、保護と開発、物と心、自然と文化、過去と未来の調和を保ちながら、緩やかに、かつ確実に国を発展させていくことが大切であると説いている。
- 4 『広辞苑』第5版（1998）による。
- 5 2007年のヒアリング当時に広島市立大学芸術学部長の任にあった大井健次教授の判断で対象プロジェクトを選定した。

- 6 本稿は多くのアートプロジェクトを全体的にレビューして、まちづくりにおけるそれらの可能性を考察することが目的である。聞き取り調査は市民には行っていない。市民など多様な関係者への聞き取りは、特定のプロジェクトを対象にした詳細な調査で実行可能である。それは本稿の目的とは異なる。
- 7 行政と住民は対立しやすいが、中立的な大学が介在することにより、三者の関係がよりスムーズになった。
- 8 アーティストと市民の間で作品の質に関する意識のギャップは大きかった。しかし、アーティストが妥協せず制作する熱意は時間をかけて市民の間に伝わった。市民の意識が育つには時が必要である。
- 9 文化と呼ぶに相応しく、その変化が永続的かどうかはまだ分からないが、町の人びとの生き方を変えた。
- 10 ブンメシ（文化でメシを食べる）プロジェクト（音楽コンサートや演劇）の活動。芸術学部の卒業生が中心のアーティスト集団シアタプロジェクトが制作した「横川サスペンス」の映画など。
- 11 一般に経済が文化を振興するパターンが多かったが、横川地区では文化が経済を活性化（例えば商品開発）するインパクトが起きている。但し、まちおこし活動の「かよこの嫁入り祭り」については、企業の資金提供が不十分なために2007年度は休止することになった（中国新聞2月14日）。
- 12 被爆第一世代の60～80歳代の人たちは経験があまりに悲惨だったので記憶を閉ざしていた。二世にも伝えていない。しかし、被爆当時の生活を次の世代の人たちに伝えたいという気持ち、さらにいつか死ぬ前に記憶を後世に残す義務感を強く感じていた。
- 13 生存者とのインタビューで被爆の事実が明らかになった。思い出したくないけど思い出し、話したくないけど話したのである。そのインタビューを通して異世代交流が実現し、生存者の生と生き方に接して、若い制作者たちは濃い体験をした。被爆の語り部が増えたと言えるかも知れない。
- 14 現在に至るまでCGの上映は続いている。中国新聞2007年3月22日の記事によると、国連ニューヨーク本部で2007年4月11日に上映される。
- 15 「原風景は自己の一部」とは、誰にとっても原風景は心の中で忘れがたい大切な存在であるから、「自己の一部」であるということ。なおこの「自己」は個人の身体のみならず精神世界も含めた存在である。
- 16 保母の訓練を受けている学生でボランティアとして参加した。
- 17 モデルを集めることに苦労してきた。大学院生にも被爆者の肖像画を描くことに積極的な人とそうでない人がいる。描く側にも心の痛みを感じざるを得ない作業である。しかし誰かが描かなければ、60年の「その時」が歴史に残らないのである。
- 18 ロンドン・ナショナル・ポートレート・ギャラリーは、被爆65周年に65の肖像画を展示することを希望している。
- 19 展示では制作者による作品解説も行われた。
- 20 教員は見えない形でバックアップするが、受講生の話し合いで自ら方向性を決めて、展覧会をつくる。
- 21 「地域の感性」は比喩的な表現であり地域文化の感性的な側面である。
- 22 すでに紹介した横川のレトロバス復元プロジェクトの結果、横川が芸術家にやさしい町になったことは具体的な一例といえるだろう。
- 23 大学における芸術教育を卒業後も継続して補完する活動と位置づけられる。
- 24 中国新聞2007年3月22日の記事によれば、市民団体「岡本太郎『明日の神話』広島誘致会」が同年3月から署名活動を始めた。
- 25 以下の「コーラー」の説明は関村（2006）に基づいている。
- 26 このようなプロジェクトはコーラー以前から、広島市周辺のいろんな地域において、本学の教員・学生によって行われてきた。そのような活動は「彫刻シンポジウム」として、1950年代にオーストリアで始められた。そこでは彫刻家たちや一般の人たちが交流しながら、制作過程で係わり合いながら、土地の素材を使って作品をつくるのである。
- 27 比較的長い時間をかけて交流したことが、互いの関係づくりに有効であったと思われる。
- 28 このような制作活動（art in residence）は倉橋島、音戸、東広島、長崎などの場で行ってきた。いろんな地域に学生が対応できるようになった。活動を重ねるにしたがって作品は進化して学生も成長している。地域の人びとと学生との交流の中で相互進化し、大学の中だけで制作するよりも学生の人間性が膨らむのである。
- 29 大学周辺の新興住宅団地では文化のまちづくりのアイデアが生まれている。新興住宅団地ゆえに団地内には歴史的な文化がないので、お祭りのような自分たちの文化を創りたいという思いがある。大学のアートプロジェクトがそのようなアイデアの誕生を刺激している

- ように思われる。
- 30 地元住民によると竹林として立派に再生したのは60年ぶりのことである。
- 31 住民と学生の合計約30人で、5千平方メートルにある約800本の竹を伐採した。
- 32 竹の伐採作業は坂道を何十往復もして体力を限界まで使う。聞き取りによれば、このような自然の中での活動は楽しく、心身に非常に健康的であり、自分と素材と環境が繋がるのである。
- 33 地域の環境や自然の維持を政府や地権者のみに期待する時代は終わりつつあると私は考えている。住民の生活環境の維持管理は、「近代」の法律や所有権の制約を乗り越えなければならない。すなわち「新たな公共」を私たちは創造しなければならない。
- 34 このシンポジウムにおいて筆者は演題に沿い「アートによる文化のまちづくり」と題して講演をして（2007年4月1日）、展覧会にも参加した。
- 35 数多くの「繋がり」が存在するが、普遍性や重要性を考えて、人と自然と時の間の繋がりに注目したい。
- 36 「平和の文化」とは平和を促進する文化のことである。
- 37 「再構築」と表現した理由は、近代以前の社会（例えば江戸時代）に民（みんな）が支える公共が存在していたからである。その公共は近代以降の日本社会において、政府・行政の独占するところとなった。
- 38 公共空間を単に「みんなの世界」と表現するのは単純に過ぎるかもしれないが、「公共」とは何かの議論に立ち入ると、本稿の焦点がぼける。「みんなの世界」は一般の多くの人にとって分かりやすい表現であろう。
- 39 この公共意識は経験したことのない新しいものではない。近代化以前には一般的な社会のあり方であった。「結い」や共助などの助けあいの仕組みや、住民が公共事業を担う普請制度なども、市民が公の世界を担うものであった。「普請」は「普く（あまねく）人びとに請う（こう）」という意味である。
- 40 本稿ではアートによる文化のまちづくりの可能性について述べた。その可能性は必ずしもすべてのプロジェクトにおいて、すでに十分顕在化しているとは限らないが、小規模ながら顕在化しているものまたその可能性が期待できるものをもとにして考察した。

## 参考文献

全国建設研修センター.1996.『全国市町村長が推薦する地域づくり成功事例集』ぎょうせい.

- 関村誠.2006.「芸術創造の〈場〉としてのコーラー」広島市立大学ニュルンベルク美術大学アートプロジェクトチーム『ART PROJECT KHORA』42-45.広島市立大学.
- 田村明.2000.「まちづくりとは何か」まちづくり研究会『基本まちづくり事典』ぎょうせい.
- 都市経営総合研究所.1999.『全国自治体まちづくり先端情報2000』中央法規.
- 中島正博.2005.『持続可能な社会のための人間の条件』大学教育出版.
- 松下啓一.2002.『新しい公共と自治体』信山社.
- 広島市立大学芸術学部広報委員会.2006.『広島市立大学芸術学部紀要第11号 芸術学部の歩み1994-2004』広島市立大学芸術学部.
- 広島市ひとまちネットワーク三條公民館.2005.『RETROBUS 市民活動の現場から』.
- レトロバス復元の会.2004.『横川・可部 レトロバス復元物語 失われたロマンティズムを求めて』.

(掲載許可2007年7月23日)